

## 平成21年度購入文化財一覧

### 【九州国立博物館】（計24件）

- 1 ○種 別 <絵画>  
○名 称 紙本著色病草紙断簡（侏儒）  
(しほんちゃくしょくやまいのそうしだんかん しゅじゅ)  
○員 数 1幅  
○時 代 平安-鎌倉時代・12世紀  
○品 質 紙本著色  
○寸法等 縦26.3 横40.7 cm  
○作品概要

掛幅装。詞書1紙と絵1紙からなり、状態は良好だが全体的に褪色がみられる。軸端は象牙。もとは絵巻の一部であったものが一段ずつに改装され、現在は掛幅装になっている。

画面向かって左に老いた法体の侏儒を、右に侏儒を嘲笑する京の人々を描く。「侏儒」とは並外れて背丈の低い人のことで、本図でも童に比べさらに背丈の低い人物として描かれる。手に数珠と扇を持ち、眉間や目じりにシワを寄せ、歯の抜けた口を大きく開いて右後方を振り返り、嘲笑する人々を威嚇している。頭頂に薄墨を施し、法衣にはわずかに黄味を差す。

薄黄緑の狩衣を着た男性と袈裟をまとった法師は、それぞれ侏儒を指差し嘲笑している。青い衣に頭飾りをつけた茶髪の童と白衣の童は手を叩きながら侏儒を囃し立てている。背景の表現はないが、詞書の記述から京の路上の様子を近接して描いたと思われる。

それぞれ人物の額、容貌、腕、足には肌色を差し、狩衣の下衣にわずかに黄味を入れるなど、繊細な色彩表現が見られる。線描は鋭く勢いがあり、人物描写は闊達である。

なお詞書と絵の料紙には一部切詰がみられるが、掛幅装へ改装された時点では図様や構図に改変がないことが卷子装時の模本により明らかである。また本図には寛政9年（1797）閏7月の古筆了意（1751-1834）の極札、および文政2年（1819）2月の大倉了恵（?-1825）による極札が付属する。

「病草紙」は昭和初期まで1巻15段の絵巻として名古屋の関戸家に伝来していた。このほか断簡5段が現存しているが、これら計20段は法量（縦）や品質形状、画面形式が一致することから本来一具を成していたと考えられる。卷子装時に付随していた土佐光貞（1738-1806）の奥書により、1巻および本図が寛政8年（1796）の時点で歌人・大館高門（1776-1839）の所蔵であったこと、またこのとき本図が既に断簡であったことがわかる。

作風をみると、人物の顔貌および形態は一連の「病草紙」の中でも特に「歯槽膿漏の男」や「小舌の男」（どちらも国宝、京都国立博物館蔵）に近似し、このほか「地獄草紙」（国宝、東京国立博物館蔵）や「餓鬼草紙」（国宝、京都国立博物館蔵）にも極めて近い表現を見出すことができる。これらの絵巻は12世紀末に後白河法皇（1127-92）のもとで活躍し、「年中行事絵巻」（現存せず）や「伴大納言絵詞」（国宝、東京・出光美術館蔵）を描いたとされる宮廷絵師・常盤光長（生没年不詳）の制作と考えられていることから、本図も同時期に後白河法皇や光長の関与により制作されたものと考えられる。

「病草紙」とは病の症例や治療の様子を集めたものであるが、それは単なる病の症例集ではなく、「地獄草紙」「餓鬼草紙」と同様に六道のうち「人道」を絵画化した六道絵巻の一つであり、因果応報により引き起こされる奇病や不具を記している。近年、その描写内容の典拠として瞿曇般若流支訳『正法念処経』が指摘されており、本図にはその巻七「地獄品之三」の一節（「若於前世過



去久遠。有善業熟。不生餓鬼畜生之道。若生人中同業之処。得侏儒身。」(ほか)に相当する描写がみられる。しかし「病草紙」では、全段を通じて經典に記述のないモチーフがあり、人間の滑稽さを如実に表現するなど、六道を描出するという観点からは外れる内容、特に弱者への眼差しや都の喧騒などのテーマが多くみられることが指摘されている。本図においても、法体の侏儒が、信仰に身をおく法師ほか老若の人々により嘲笑されており、その内容は後白河法皇が関与した絵巻に見出せる特徴をよく示したものであると見てよい。

本図は断簡ではあるものの、優れた作風は光長様式をよく示しており、内容的にも1巻を成していた「病草紙」それ自体の特徴や、後白河法皇が関与して12世紀末期に宮廷で制作された絵巻の趣向をよく伝えており、この時期の絵画を代表する優品である。

○来歴

大館高門、関戸家旧蔵

○購入金額

178,500,000円 (平成21年度第1回鑑査会議)

2 ○種別

<絵画>

○名称

絹本着色春日宮曼荼羅図

(けんぼんちやくしよくかすがみやまんだらす)

○員数

1幅

○時代

鎌倉時代・13-14世紀

○品質

絹本着色

○寸法等

縦68.6 横29.7 cm

○作品概要

掛幅装。画絹1副1鋪。画面は暗く横折れやウキがあり、目の詰んだ画絹や顔料には部分的な損傷もあるが、全体に当初の図様をよく保つ。軸端(後補)は銅造鍍金である。

本図は、左上の本殿四社とその右上の若宮社を中心とした春日社の景観を主題とする。上辺の春日山・御蓋山から下辺の東西両塔・一鳥居まで社頭を西側から俯瞰的に表し、随所に鹿、満開の桜や梅をはじめ多種の樹木を配し、これらを濃彩で丁寧に描く。

建築に着目すれば、実景に従い南面し右側を向く本殿を回廊が囲み、その南門を楼門と、西三門を四脚門とする構成は、治承3年(1179)以降の基本的な殿舎の配置と構造をほぼ正確に描写する。この構成は30件以上もの作例が現存する春日宮曼荼羅図の一般的な定型を踏襲するものだが、なかでも新出作品である本図は、一鳥居に櫛を取り付ける微小な表現や、西塔の基壇・回廊など建築を破綻なく写す正確な線描を評価すべき一本と考えられる。

その年代については御蓋山の樹法と参道・土坡の彩色が指標となる。御蓋山を多彩な樹種で折り重なるように埋め尽くす描写は、基準作の湯木美術館本(正安2年(1300)制作)に共通し13世紀後半の様式を留めている。また現状では参道・土坡に金泥が確認できない彩色法は、13世紀制作の根津美術館本に通じる古い要素と説明できる。そのため本図は、鎌倉時代の13世紀末から遅くとも14世紀初にかけての制作と考えられる。

小幅であり画絹・顔料の損傷も惜しまれるものながら、本図は現存作例の少ない春日宮曼荼羅図のなかでも、彩色が丁寧に線描も繊細な古い優品として注目される。

従来の研究により、春日宮曼荼羅図は13世紀末から14世紀初に構成の定型が成立したことが知られている。本図は、制作推定年代がその成立時期に重なるため、本格的に構成が継承される以前の初期の図様を伝える作例として貴重である。

また用途に着目すれば、春日宮曼荼羅図は法会や春日講での使用も知られるが、とくに小画面で繊細な表現をとる本図は、14世紀に流行した貴族の邸宅における私的な遙拝儀礼の本尊であった可能性が高い。鎌倉時代には本地垂迹思想に基づく社頭浄土観が隆盛し、春日社の景観を描く絵図は当時の僧侶により此岸の浄土



を表すものと説明されたが、このような当時の思潮を象徴する垂迹曼荼羅のなかでも、本図は年代が13世紀に遡る可能性もある優れた新出作品として大いに注目される。

○来歴 井上公爵家伝来  
○購入金額 50,400,000円（平成21年度第1回鑑査会議）

3 ○種別 <絵画>  
○名称 絹本着色柿本人麿像

(けんぼんちやくしよくかきのもとひとまるぞう)

○員数 1幅  
○時代 室町時代・15世紀  
○品質 絹本着色  
○寸法等 縦84.2 横38.1 cm  
○作品概要

掛幅装。画絹1副1鋪。目の詰んだ画絹を用いる。一部顔料の剥落と、人物の容貌や袖口などに後世の補彩が見られるが、状態は概ね良好で当初の図様をよく保っている。軸端は象牙。

本図は著色の人物、水墨の山水、描色紙形の3つから構成されている。画面下方に、硯箱を前に筆と紙を持ち、上置に片膝をついて上方を見ながら和歌を思索する人物を描く。萎え装束の烏帽子に直衣姿で、薄い水色の袍には丸文を、白い指貫には盛り上げで唐草文を配す。人物の輪郭線は薄墨線の下描きの上に柔らかな朱線を重ね、衣文は墨と群青を重ねたやや太めで均一な線描を用いる。濃墨で瞳、上瞼、鼻孔、唇の閉じ合わせをひき、淡墨で目の皺や小鼻を描くなど微細な表現が見られる。上方には水墨による針葉樹の立つ懸崖、霧にかすむ帆船と湖畔、遠山が広がる。画面上端には、2つの描色紙形が並び、左方には対角線状に赤と白に塗りわけた地に、金泥で波・千鳥・胡蝶を描き、右方には黄土の地に金泥で梅を描く。いずれも墨書はなく、赤外線撮影によっても見出すことはできなかった。

その姿や持物から本図に描かれている人物は柿本人麿と理解してよく、山水景に描かれる霞や岸辺に隠れる舟などは『古今和歌集』に収録される人麿の代表的な和歌「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ」に結びつくものと考えられる。

本図は著色の人麿像と水墨山水図を一画面に取り合わせた極めて珍しい作例である。柿本人麿(660頃-720頃)は「歌の聖」として平安時代には既に信仰の対象として崇められ、元永元年(1118)には肖像を祀った人麿影供が行われていた。以来人麿像は和歌会や連歌会に欠かせぬものとして中世を通じて数多く制作されており、現存作例は20件近くに及ぶ。

人麿像の文献上の初出は、藤原兼房(1004-69)が夢に見た「左の手に紙をもち、右の手に筆を染めて、物を案ずる気色」を絵師に描かせたもの(『十訓抄』)とされる。現存最古の例は、兼房の記述に従う佐竹本三十六歌仙図の人麿像(出光美術館蔵、鎌倉時代・13世紀)であるが、この他現存作例は、佐竹本と同図様(第一種)のもの、紙や筆を持たずに脇息に身を大きく委ねる図様(第二種)など数系統が存在する。本図はこのうち佐竹本や一蓮寺本(山梨・一蓮寺蔵、鎌倉-南北朝時代・14世紀)に連なる第一種に属するものである。人物の輪郭にみえる柔らかな朱線と、上瞼の墨線を強調したやや扁平な容貌表現は「足利義満像」(伝飛鳥井雅親賛、重文、京都・鹿苑寺蔵、室町時代・15世紀初)など室町時代初の人物描写に通ずる。

山水表現に注目すると、「平沙落雁図」(思堪筆、一山一寧賛、個人蔵、13-14世紀初)に見られるような火花を散らしたような樹木描写に、日本における初期水墨画に通じる表現が指摘できる。また、「山弈候約図」(中国・遼寧省博物館蔵、遼時代・10世紀後半)などの中国絵画に近い針葉樹や懸崖の描写もあり、朝鮮絵画



にはしばしばみられるが室町絵画としては極めて珍しい北宋山水画に通じる要素もみられる。さらに、近景である懸崖より中景の土坡を大きく描くなど遠近表現に一部破綻がみられることなどから、これらについては年代の遡る像主を想起させるために、古様の山水図を意図した可能性がある。

このような伝統的なやまと絵の技法を用いた人物図に水墨山水を取り入れる例は、応永14年(1407)制作の巖島神社五重塔壁板(真言八祖と瀟湘八景)にみられる。本図も15世紀前半の制作と考えられるが、このような組み合わせ例は極めて少ないため非常に重要な作例であると考えられる。

○購入金額 32,550,000円 (平成21年度第1回鑑査会議)

- 4 ○種別 <絵画>  
○名称 紙本金地著色韃靼人狩獵図 六曲屏風  
(しほんきんじちやくしよくだつたんじんしゅりょうず ろつきよくびょうぶ)  
○員数 1双  
○時代 安土桃山-江戸時代・16-17世紀  
○品質 紙本金地著色  
○寸法等 縦各157.5 横各487.8 cm  
○作品概要



屏風装。引き手跡により襖絵より改変したことが明らかである。一部欠損箇所補紙。全体に顔料の剥落がみられるが、当初の図様をよく保っている。

画題は韃靼人の狩獵の様子と、貴人が行列する様を描いている。狩獵隻は金雲により近景と遠景にゆるやかに大別されており、近景である平地の狩獵場では、弓や槍を構え犬とともに猪や虎、豹を追い立てる騎乗の韃靼人を描く。岩上からは狩場を見下ろし狩獵を見学する貴人の一行が覗き、遠景には雪を被った懸崖がそびえ、その谷間には薄い赤と青で彩られた樹木がみえる。行列隻も同じく金雲により大きく前後に分けられており、先駆に続き後方から傘を差しかけられた貴人と従者による行列が描かれ、遠景には向かって右より第1・2扇に韃靼人の居住施設であるパオと川、第3・4扇に懸崖、第5・6扇に丘陵を配する。

人物は全て大きな鉤鼻に深い小鼻を描き込み、口髭と顎鬚をたくわえる。着衣は強い打ち込みを伴うやや短い線描を重ねて輪郭を描き、緑や赤で地を塗り分け、上から金泥で文様を施す。馬は臀部が細く胴体に厚みがあり、胸元の筋肉をY字状に強調する。岩や山肌は太く硬質な短線により形取られ、皴はやや細めの線描を重ねて表現する。

落款や印章はないが、人物の容貌や樹木、岩の特徴から狩野派絵師による作品と考えられる。

中国の北方異民族による狩獵の様子を描いた韃靼人狩獵図は、南宋時代には既に盛んに制作されていたことが知られる。日本においては室町時代後期から江戸時代初期にかけて流行し、特に権力者の邸内をかざる障屏画などとして好んで描かれたことが文献上明らかで、現存作例も30件近くにおよぶ。本図はこのうち、近年新たに見出された作品である。

日本における韃靼人図の文献上の初出は、室町時代・15世紀後半、足利義政(1436-90)が築いた東山殿会所襖絵で、南宋時代の画家・李安忠(1127-1279)の粉本を基に描かれたものとされる。現存する最古本は、伝狩野元信筆静嘉堂文庫本(6曲1双、室町~安土桃山時代・16世紀中頃)および式部輝忠筆文化庁本(6曲1双、室町~安土桃山時代・16世紀中頃)であるが、いずれも紙本墨画淡彩の襖絵を屏風に改変した作品である。

韃靼人狩獵図は先行する図様の繰り返しにより人物や建造物などが定型化しており、近年の研究によると大きく2つに分類できる。一つは「文姫帰漢図巻」(1巻、奈良・大和文華館蔵、明時代、

原本南宋時代)など先行する卷子本から図様を取材し、狩猟図隻と打球図隻を組み合わせた静嘉堂本系で、現存作例の半数以上がこれに属し、その大半が狩野派絵師による。もう一つはこの図様に近似しない、狩猟図隻と祝杯図隻を組み合わせた文化庁本系で、これらは式部輝忠のほか雲谷派の作品が多い。本図は狩野派作品ながらも、狩猟と行列を組み合わせたもので、人物についても、現状の限り他作品に見られるような堅固な図様の共有が見られないため、どちらの系統にも属さない極めて珍しい作品といえる。

人物の大きな鉤鼻、小さな口元、輪郭といった容貌の特徴は、狩野永徳(1543-90)一派による天正14年(1586)制作の南禅寺本坊大方丈障壁画の一部に近似するが、全体に表情が強ばり肢体が短軀である。また下から上へ向かって突き出すような懸崖や細かい皺を繰り返し重ねる土坡、薄い赤と青を用い葉叢の輪郭を描かない樹木表現などは、永徳の弟・狩野宗秀(1551-1601)の伝承がある「韃靼人狩猟・打球図屏風」(6曲1双、アジア・サンフランシスコ美術館蔵、安土桃山時代・16世紀末)に共通する。しかし容貌表現を比較すると両者には隔たりが見られることから、同一筆者とみなすことは困難であり、本図は16世紀末から17世紀初にかけて宗秀とほぼ同時期に活躍した狩野派絵師による作品と考えられる。

○来歴 岡山・平松家旧蔵  
○購入金額 50,000,000円 (平成21年度第1回鑑査会議)

5 ○種別 <絵画>  
○名称 紙本著色九相図  
(しほんちゃくしょくくそうず)  
○員数 1巻  
○時代 鎌倉時代・14世紀  
○品質 紙本著色  
○寸法等 縦32.0 横495.4(第1紙50.0、第2紙49.3、第3紙49.8、第4紙49.9、第5紙49.7、第6紙50.0、第7紙49.7、第8紙50.2、第9紙49.2、第10紙47.6) cm

○作品概要 卷子装。全体に擦れや褪色が見られるが、線描はよく保たれ剥落も少ない。第1紙の人物の右側から下にかけて大きく欠損し補紙があてられており、紙継箇所にながかに本紙を切り詰めた跡が見られる。軸端は象牙。

本図は女性の生前の様子1図と、死して朽ち果てる9段階の過程の9図の計10図を描く。詞書や奥書はない。第1図は上畳に坐し右手を肩近くまで上げ、右膝を立てて向かって右方を向く女性を描く。垂髪に濃緑の袷と朱の長袴を身に付け、胸前に懸守と思しき朱地金泥の円形物が見える。第2図は上畳に横たわり、小松散らし文様の袷をかけた死後間もない女性の遺体を描く。口元がわずかに開きお歯黒が覗く。以降段を追って第3図は腐敗がはじまり体が膨脹した姿、第4図は目玉が飛び出し体がどす黒く変化する姿、第5図は腐敗が進み裂部が広がる姿、第6図は内臓が飛び出しウジが湧く姿、第7図は水分が飛び骨と皮になる姿、第8図は狗や鳥に啄ばれる姿、第9図は白骨化した姿、第10図は骨が散らばる姿をそれぞれ描く。

いずれも人物を近接して描き、背景をほとんど持たない。やわらかく伸びやかな線描を用いて輪郭線を表す。細かな陰影や時間の経過による亡骸の色変化を、染料や顔料を塗り重ね巧みに表現している。また毛髪や鳥類・狗の毛描き、身体から滲み出る体液といった微細な表現が随所に見える。

九相図とは、屍が白骨化する過程を9段階に分け観想する「九相観」を主題とする絵画を指す。九相観とは人体の不浄を強く自覚することで淫欲を滅する修行の一つとされ、中国・六朝時代の



鳩摩羅什（350-409）訳『大智度論』、隋の智顛（538-597）『摩訶止観』など多くの教典や経論に説かれている。日本には奈良時代に請来され、平安時代・10世紀末に源信（942-1017）『往生要集』や伝空海（774-835）『九相詩』の成立により広く流布した。

日本絵画における九相図の文献上の初出は、貞応2年（1223）に建立された醍醐寺焰魔堂の九相図壁画である（『醍醐寺新要録』『琰魔堂篇』）。現存最古例は国宝「六道絵」（滋賀・聖衆来迎寺蔵、鎌倉時代・13世紀）の「人道不浄相」で、本図はこれに次ぐ作例であり、卷子装最古の例として「中村家本」「個人蔵本」の名で知られている。なお中世の九相図はこのほか、九州国立博物館本（室町時代・文亀元年1501・A56）と大阪・大念仏寺本（室町時代・大永七年1527）の2点が知られるのみである。

本図と聖衆来迎寺本は先行研究において『摩訶止観』との密接な関係が指摘されている。それによると九相は「一脹想」「二壊想」「三血塗想」「四膿爛想」「五青瘀想」「六噉想」「七散想」「八骨想」「九焼想」があり、さらに「八骨想」は2種に分けられること、「九焼想」は重視しないことが説かれている。また生前の様子と死後間もない様子についても記述する。本図の構成は「七散想」「九焼想」を欠き、代わりに生前の姿1図、死後間もない姿1図、および「八骨想」をもう1図を加えるが、これは『摩訶止観』本文を忠実に絵画化したことに由来すると考えられる。「七散想」を欠く要因は不明であるが、「九焼想」の欠如や3図の追加は聖衆来迎寺本に見られないことから、本図がより『摩訶止観』との関係が深いことが指摘できる。

- 来歴など 東京国立博物館寄託
- 購入金額 399,000,000円（平成21年度第2回鑑査会議）

- 6 ○種別 <絵画>
- 名称 絹本着色東帯天神像
- 員数 1幅
- 時代 南北朝-室町時代・14-15世紀
- 品質 絹本着色
- 寸法等 縦90.8 横40.7 cm
- 作品概要

<絵画>

絹本着色東帯天神像

(けんぽんちやくしよくそくたいてんじんぞう)

1幅

南北朝-室町時代・14-15世紀

絹本着色

縦90.8 横40.7 cm

掛幅装。画絹1副1舗。小さな絹の欠損と大きな折れ等が見られるが、顔料の剥落は少なく当初の図様をよく保っている。なお上辺と右辺にわずかに切り詰めがみられる。軸端は象牙。

画面中央には高麗縁の上畳に坐して左方を向く東帯姿の人物と、髪を美豆良に結う狩衣姿の童子を描く。画面上方に墨書を伴った描色紙形を、下方には梅と若松をそれぞれ生けた華瓶を供える。中央の人物は垂纓の冠を被り、黒で梅花文を描いた袍に身を包み、太刀を佩き、左手に笏を持ち右手でそれを上から押さえつけている。

口元をわずかに開き、大きな眼を見開く。これらは東帯天神像の典型的な特徴である。童子は金泥による文様をあしらった狩衣や裃を身につけ、梅文のついた檜扇を手にする。

画面上方の2つの描色紙形には『菅家後集』所収の漢詩「不出門」の一節と、道真ゆかりの「東風ふかば」の和歌をそれぞれ記す。白地の色紙形には銀泥で梅樹と胡蝶を、赤地の色紙形には金銀泥で松と胡蝶を描く。

下部に位置する一対の華瓶には雲気文と牡丹唐草文が表現され、それぞれ向かって左に蕾と花卉をたたえた梅の枝を、右に若松の枝を生ける。梅は薄桃色の地に細い白線で花卉の輪郭と花脈、雌しべなど表し、若松は、現在は剥落しているが緑青で天に向かい伸びる針状葉を描く。

なお上巻に永仁4年（1296）12月の年紀と藤原孝久かと読める



人名が墨書されている。

東帯天神像と童子像を一画面に取り合わせた唯一の作例である。菅原道真（845-903）の像は信仰の広がりとともに多数制作されたが、童子を伴うものは他に見出せないことから、本図は特別な由緒に基づいて制作されたと考えられる。平安時代末期に成立した「天神縁起」によれば、道真は菅原是善（812-880）邸の梅樹の下に童子姿で化現したとされており、本図の童子が梅文をあしらった檜扇を手にしていることに鑑みると、道真の幼少の姿である可能性が指摘できる。また画面下方の華瓶は像主が礼拝の対象であることを示すと考えられ、この描写も東帯天神像においては極めて珍しい。

その表現に注目して年代を考察すると、張りのある鼻梁線や人物の顔の線描に沿ってわずかに見られる朱の隈などが「聖徳太子童形像・二童子像」（個人蔵、鎌倉時代・13世紀）などに共通する。また童子のふっくらした顔の輪郭、跳ね上がるような眉、濃墨で引き表した上瞼、朱で彩られた肉厚の唇などの特徴は鎌倉時代に見られるもので、重要文化財「毘沙門天像」（滋賀・実蔵坊、鎌倉時代・13世紀）の童子像に類似した表現を見出せる。その一方で、平板な太刀の装飾や、冠に見られる水平状の筭や立ち上がるような纓の表現は主に14-15世紀の肖像画に散見される。また、顔の輪郭線が一部不自然に太く、立体感表出のための線の描き分けができていないこと、直線的な線描による衣文線など、先行例を写した際にみられるような特徴も見出せる。

このように一画面に複数の時代の要素が並存することについて、上巻墨書が参考になる。永仁4年（1296）の年紀は制作時期を示すものではないが、この頃に成立した先行例を南北朝時代-室町時代・14-15世紀に写したとすれば、複数の時代要素について理解しやすい。天神像が古例に倣う性質は、北野天満宮本（根本御影、南北朝-室町時代・14世紀）にも見られる。童子を伴い華瓶を備える図様は他に見られないことから、本図は特殊な制作事情を背景に成立した東帯天神像の一例を伝えるものとして極めて重要な意味を持つと考えられる。

なお「騎獅文殊菩薩及脇侍像」（奈良・西大寺、鎌倉時代・14世紀）の像内納入品である「大般若経」巻173に、「正安四年五月廿四日 左衛門尉藤原孝久」の奥書があり、上巻墨書と同一人物である可能性がある。

○銘文など

本紙色紙形墨書「都府楼纒／瓦色観音寺／只聞鐘聲」「こ地婦か半に本／ひお古勢口梅乃／者那ある思な之と／帝者流をわ寿流な」、蓋表墨書「天神真筆御影」、箱側面貼紙「口京寶物／天神口像」、上巻墨書「自先祖代々相伝口也／永仁四申丙年十二月日 従五位下左衛門尉口／藤原」

○購入金額

50,000,000円（平成21年度第2回鑑査会議）

7 ○種 別

<絵画>

○名 称

紙本墨画淡彩山水図

（しほんぼくがたんさいさんすいず）

○員 数

1巻

○時 代

室町時代・15世紀-16世紀

○品 質

紙本墨画淡彩

○寸 法 等

縦19.5 横549.0（第1紙35.6、第2紙38.0、第3紙38.2、第4紙38.4、第5紙38.2、第6紙38.3、第7紙38.2、第8紙23.9、第9紙39.0、第10紙39.2、第11紙38.7、第12紙38.9、第13紙39.7、第14紙39.9、第15紙24.8）cm

○作品概要

卷子装。本紙には擦れやたわみがあり、虫損の跡などに補修もあるものの、全体に線描や彩色は保たれており、図様もよく留められている。軸端は象牙。



この画卷には、4字の題名が記された7つの場面がある。画面は冒頭から、騎驢の一行が芽吹く柳下を歩む「柳口尋春」、花咲く桃の間で酒旗が風に吹かれる「桃嶮輕帘」、川沿いの室内で2人が対面する「春溪小築」、杖を持つ高士の一行が岩陰から歩み出る「短筈出口」、澄んだ河を渡し船が進む「清溪晩渡」、竹藪の中に2棟の屋根がのぞく「竹嶋幽房」、旅人が中腹の関所を目指す「山腹南關」で構成されている。このうち第7紙と第8紙の継ぎ目つまり「短筈出口」と「清溪晩渡」の間には不自然に図様が途切れる箇所があり、また第8紙が短く紙継ぎに乱れがあるため、ここには場面の欠失があると認められる。

その表現は人物の持物や季節を示す植物の成長までを細やかに描出する優れたもので、丁寧な筆致と茶と青が基調の明るい彩色を特徴とする。狩野安信の極書から、周文の後継者として足利將軍家の御用絵師となった小栗宗堪(1413-1481)筆の伝承を持つ作品として知られている。

室町時代に高く評価された南宋時代の画院画家・夏珪の様式にならう山水図巻である。夏珪の作品は足利將軍家の中国絵画コレクションのなかでも特に重視され、室町水墨画のモデルとしての役割を果たしたが、本図でもモチーフの描法や画面の構成法にその影響をみることができる。本図の全体的な図様は、伝雪舟筆山水図巻模本(個人蔵)に、冒頭の二場面は雪舟筆山水図巻(重要文化財、京都国立博物館蔵)に共通することから、この山水図巻は当時流布した夏珪様山水図の典型的な図様を伝えており重要である。

その作者・年代は、丁寧な細筆と明るい淡彩が足利將軍家の同朋衆・芸阿弥(1431-1485)の画風に通じ、やや遅れる時期の画風を示すことから、15世紀末から16世紀初にかけて京都の画家により制作されたと考えられる。日本では画卷形式の山水図は現存作例が少なく、最も古い室町時代の1500年を前後する時期の作品も6件を数えるのみで、本図はその貴重な一本と位置付けられる。このうち未指定の本図を除く5件は全て国指定品であり、本図もこれらに類した絵画史的な意義を与えられると考えられる。

- 銘文など 本紙に墨書「柳口尋春」「桃嶮輕帘」「春溪小築」「短筈出口」「清溪晩渡」「竹嶋幽房」「山腹南關」
- 購入金額 55,000,000円 (平成21年度第2回鑑査会議)

- 8 ○種別 <絵画>
- 名称 紙本墨画葡萄図 六曲屏風 李蔭庭筆  
(しほんぼくがぶどうず ろっきょくびょうぶ りいんていひつ)
- 員数 1隻
- 時代 朝鮮 朝鮮時代・17世紀-18世紀
- 品質 紙本墨画淡彩
- 寸法等 縦128.4 横205.6 cm
- 作品概要 屏風装。経年による本紙の汚損などはあるが、状態はおおむね良好である。

駆け抜けるように伸びる葡萄を、墨一色で描く。その幹では、輪郭や節目が擦れた濃墨で線描されており、動勢が強調されている。これに対し枝や葉、果実は、没骨技法による輪郭線のない墨面で表現されている。とくに葉と果実では赤味と青味のある2種類の墨が用いられ、墨面の濃淡の対比や縁取りに地色を残す描法によって、モチーフの表裏や重なり合いが表されている。その墨色の階調を微妙に、ときに大胆に変化させる墨面は、幹の存在感のある墨線と見事に呼応している。つまり本図は、墨線と墨面とに主眼をおく2つの水墨技法を自覚的に区別して用い、これらを巧みに融合して画面を形作っていると説明することが出来る。屏風装。引き手跡により襖絵より改変したことが明らかである。



一部欠損箇所に補紙。

西域からもたらされた葡萄は東アジアでも美術工芸の意匠として盛んに造形され、とくに朝鮮では水墨画の主題として好まれた。本図は、このような朝鮮絵画の葡萄図を代表する出来映えの優品であり、現存作例の少ない屏風などの大画面の1本として貴重である。

作者の李蔭庭は詳しい伝歴が知られず、年代も落款からは「癸卯」である以上のことは判明しない。その動勢の表出に注目して年代を考察すれば、本図は、大らかな動きの枝が優美な表現をとる李繼祐(1574-1646以降)の葡萄図(韓国・国立中央博物館、大和文華館)よりも形態自体の面白さを追求していることから、17世紀後半以降の制作と考えられる。しかし枝や葉の動勢が停滞し形式化が進む傅氏筆葡萄図(個人蔵)など18世紀の作例と比較すれば、本図はより明快で力強い表現をとり、高度な水墨技法をも駆使しているため、年代が遡ると思われる。基準作がなく確定は難しいものの、その制作は17世紀後半から18世紀初頭にかけてとみなすのが妥当と考えられ、落款の「癸卯」は朝鮮・顯宗4年(中国・康熙2、1663)または景宗3年(雍正元、1723)に相当する可能性が高いと思われる。

○銘文など 「逢時青換紫得意苦来甜／歳次癸卯荷月摸倣晋人筆法／於綵美書屋／澤軒李蔭庭」

○購入金額 35,000,000円 (平成21年度第2回鑑査会議)

- 9 ○種別 <書跡>  
○名称 大般若波羅蜜多經 卷第三百七十九 東大寺八幡宮經  
(だいばんにゃはらみたきょう まきだい379とうだいじはちまんぐきょう)  
○員数 1巻  
○時代 鎌倉時代・寛喜元年(1229)  
○品質 紙本墨書  
○寸法等 表紙 縦26.2 横21.5、本紙 縦26.2 横 第1紙50.0、第2紙52.2、第3紙51.9、第4紙52.0、第5紙52.0、第6紙52.1、第7紙52.0、第8紙51.7、第9紙49.6、第10紙50.1、第11紙50.1、第12紙50.0、第13紙50.1、第14紙50.1、第15紙50.0、第16紙49.9、第17紙49.9、軸付紙1.6 cm  
○作品概要 卷子装。濃紺に染めた表紙には金銀箔砂子を横に撒き、外題は銀泥で書いた複郭内に金字で「大般若經卷第三百七十九」と打ち付け書きする。見返しには白地に銀小箔を散らす。よく打紙を施した黄檗染め本紙料紙を紙継ぎする。軸木は1本軸で梵字17字を墨書し、天地逆に付けられている。軸首は鍍金撥形の金銅軸。首尾完存する。1紙長は50cm程度。本文料紙紙数は17紙。第2紙での計測では1行17字詰、1紙28行、界高20.0、10行界幅18.7、上欄2.8、下欄3.3。經典の文字は濃い墨色で線の太さの変化が大きい。校合の跡がある。全巻を通じて虫孔が有るが補修されている。  
○奥書など 奥書「一交了/奉施入 錢百文 佛阿弥陀佛 南野田/寛喜元年六月十五日」。本紙料紙各紙背に「東大寺八幡宮」(朱文複郭長方印)の黒印各1面有り。本紙料紙各紙背に「永観文庫」(朱文単郭方印)の朱印各1面有り。本紙料紙第一紙から八紙紙背に花押各一面有り。箱蓋表と表紙にラベル「永観文庫」「2A/23」各1枚有り。  
○購入金額 1,890,000円 (平成21年度第2回鑑査会議)



- 10 ○種 別
- 名 称
- 員 数
- 作 者
- 時 代
- 品 質
- 寸 法 等
- 作品概要

<書跡>  
 重要文化財 馮子振墨蹟 与放牛光林語  
 (じゅうようぶんかざい ふうしんぼくせき ほうぎゅうこうりにあたうご)

1 幅  
 馮子振 (1257-1327?)  
 中国 元時代・14 世紀  
 紙本墨書  
 縦 33.4 横 88.7 cm  
 掛幅装。三段表具で一文字風帯には紫印金、中廻には紺地二重蔓牡丹金欄、上下には茶紐を用いる。本文は、行書体で揮毫する。全 15 行。落款印を 3 顆捺す。軸端は象牙。作品の状態は概ね良好である。のちの修理で施された折伏せは多数確認されるが、明らかな入墨等は肉眼では確認できない。筆致や筆勢が細部まで見てとれ、馮子振の書風をよく伝えている。

馮子振は、字は海粟、号は怪怪道人といい、現在の中国湖南省の出身。元時代の官吏として、官は集賢待制史に至り、また、元時代を代表する文人の一人として著名である。その人物は、天下の書で知らないものは無いと言われるほどの博識強記で、溢れる才気に恵まれたと伝えられる。その詩には、味わいの深さと文章の見事さに定評があり、古来、書家としてよりもむしろ詩人として名を遺している。

ところで、人物理解のみならず馮子振の書を理解する上でも見過せないのは、彼の禅林との交流や禅学への深い造詣である。参禅の師と仰いだ中峰明本 (1263-1323) や語録に序を寄せた古林清茂 (?-1329)、およびそれぞれの会下の僧との交流が知られ、そのなかには日本僧も含まれる。彼らとともに日本に持ち帰られた詩や語の存在は、当時の禅林における馮子振の面目を伝える一次史料としても大変貴重だが、わが国では墨蹟に等しく尊重され伝来した事実も見逃せない。具体的な作品を挙げると、豊前国の出身で、中峰明本に参じ、建仁寺、顕孝寺 (筑前)、聖福寺 (筑前)、南禅寺などの住持をつとめた無隠元晦 (?-1358) に係る「与無隠元晦詩」(国宝、東京国立博物館蔵) および「与無隠元晦語」(重要文化財、五島美術館蔵)、また、古林清茂に参じ、花園上皇の帰依を受け長福寺 (山城) の開山で知られる月林道皎 (1293-1351) に係る「保寧寺賦跋」(重要文化財、東京国立博物館蔵) が現存する。これら以外の馮子振の遺墨として、北宋の易元吉の『草虫画卷』に賦した「画跋」(国宝、常盤山文庫蔵) が知られ、付属の書状から千利休が「海道人墨蹟」として愛蔵していたことが分かる。

その他の遺墨として、清朝末期まで中国に伝わり大正時代に日本にもたらされた「居庸賦」(個人蔵) がある。その他の遺墨として、清朝末期まで中国に伝わり大正時代に日本にもたらされた「居庸賦」(個人蔵) がある。

さて、馮子振から本作品を贈られた放牛光林 (1289~1373) は、筑前国の出身で、鎌倉時代から南北朝時代の臨濟僧。明庵栄西 6 世孫の闡提正具 (?~1329) に師事し、法兄の高山栄光の法を嗣いだ。文保 2 年 (1318) に入元し、正中元年 (1324) に帰国。帰国後は、万寿寺 (豊後)、建仁寺、天龍寺、南禅寺の住持をつとめている。晩年に、勝楽寺 (筑前)、龍祥寺 (豊後) の開山となったと伝えられ、応安 6 年 (1373) 建仁寺護国院で示寂。著述類は伝わっていない。入元中の放牛の足跡はこの遺墨以外には具体的に窺い知れないが、古林清茂に師事した石室善玖とは帰国後も交流があり、「放牛光林像」(大分・龍祥寺蔵、重文) の石室善玖の賛に「同峰法弟善玖」とあることなどから、古林清茂に参じた可能性が高いことが指摘されている。本作品は、入元中の放牛光林の人物を、梅の実の熟した様子や葡萄の香しさにたとえ、禅僧としての高い資質を賞賛し、将来を期待する内容となっている。その書は、同時代の典雅優美な趙子昂の書風とは趣を異にし、黄



山谷書法を基盤としつつも個性的な字形と雄勁な筆致を展開し、清々しく気宇壮大な書風を醸している。放牛光林の入元時期から、馮子振の60歳代中ごろの筆と考えられるものである。

- 釈 文 「日本僧、自号林放／牛。冲泊静閑、意／趣不苟。方当梅子熟／於吳苑、瞻匐香於／蘇台、緑野微茫／青山嬾散。放牛、此際、／以古鉢為芳草、以壞／衲為眠簑。他日、露地／驀牽蔗園、依旧／還尋船絵、不駕鞍／騎。鈍鉄吹毛、償他／舐犢。至是時臥取／明月、吸他清風、三／界外、別有町■（田＋童）在。／海粟老人／（朱文方印「子振」）（白文方印「海粟」）（朱文方印「怪々道人」）
- 来 歴 疋田家…矢倉家…福井恒斎一個人
- 購入金額 120,000,000円（平成21年度第2回鑑査会議）

- 11 ○種 別 <彫刻>  
○名 称 銅造観音菩薩立像  
(どうぞうかんのんぼさつりゅうぞう)

- 員 数 1 軀  
○時 代 中国 隋時代・6-7世紀  
○品 質 銅鑄造・鍍金  
○寸 法 等 総高36.7 像高23.8 cm  
○作品概要

菩薩形立像。単髻を結び、頭上正面に唐草文を基本とする頭飾を戴く。頭髪毛筋は正面髪際のみ表す。耳璫を着ける。後頭部背面中央に光背支持用の角柄を造り出す。三道をあらわす。僧祇支、裙、天衣を着ける。僧祇支は左肩から右腋にかけて衣端が見え、その衣縁に带状の縁取りを表す。裙は一段折り返し、上部には腰帯を表す。天衣は両肩に掛かって両腕内側を垂下し、衣端は蓮華座外側に掛かる。装身具は胸飾（基本帯紐、珠）、瓔珞（帯紐、珠）、腕釧（紐）を着ける。瓔珞は右肩から左膝下外側へと斜めに掛かる。左腕は垂下し、手首を外側に強く曲げ、第一・三・四指で蓋付きの水瓶を掴み持つ。右腕は強く屈臂し、右肩外側で第二指を立てながら柳枝を持つ。背面全体を扁平に処理し、着衣や衣文は線刻で表す。背面から側面にかけては角張った面取りをする。やや腰を右にひねり、左脚をわずかに遊ばせて立つ。蓮華座上面は中心でややふくらむ。

銅鑄造。頭軀及び後頭部光背支持用柄、蓮華座を含んで全容を一鑄する。髻後方の後頭部上方部に一箇所と裾裾底面の背面部一箇所に、中空部と連結する不整形の開口部がある。中型土はほぼ像内に残存する。鍍金は頭飾より後方の頭髪部から背面頸部にかけてを除く全面に施される。彩色は認められない。

保存状態は、左手第二指付け根より先、右手第一指付け根より先と柳枝の先、後頭部光背支持用柄、天衣両先端（足首付近より蓮華座に至る部分）が欠失。反花以下の四脚台座は後補。

やや腰をひねって立つ姿を両手の動きと相まった的確に捉えている。装身具は大ぶりがつ豪華であり、背面の造形を扁平に処理するなど、中国・隋時代の金銅仏の特色がよく表れている。

- 購入金額 63,000,000円（平成21年度第1回鑑査会議）



- 12 ○種 別 <陶磁>  
○名 称 朝鮮唐津水指 唐津  
(ちょうせんからつみずさし からつ)

- 員 数 1 口  
○窯・制作地等 唐津  
○時 代 江戸（桃山）時代・17世紀  
○品 質 陶器  
○寸 法 等 高15.8 口径9.1 底径11.1 最大径22.8 cm  
○作品概要

叩き成形の水注形手付の水指。底から腰部へと広げながら立ち



上がり、側面は口縁に向かって僅かに開いた円筒形となる。肩で直角に折れ、蓋受けのある口縁とする。振った二本の粘土紐を肩から腰部に貼り付け把手とする。注口はたたら成形で、胴部の中央よりやや上方に付け、直角に近い角度で上方へと折れ曲がり、端部はやや開き気味となる。注口内部には詰め物がされ、端部にわずかな欠損があり、漆によって修理されている。

内面から外面上半分は黒褐釉が施される。下半分は藁灰釉を掛け、腰から底部にかけては釉を拭き取る。中央部分には釉の掛け外しが生じている。肩部分に一ヶ所、焼成時の熔着跡がある。

唐津窯は朝鮮半島の陶工によって16世紀末に開窯の西日本を代表する陶器窯。畿内との結び付きが早くからあり、茶の湯の隆盛に対応し、桃山茶陶を作り出している。黒と白の釉薬を掛け分ける技法は朝鮮唐津と呼ばれ、畿内での片身替の装飾の流行に対応したもの。唐津や高取で行われ、唐津の藤川内窯で優品が多く作られている。

この作品は朝鮮唐津水指で典型的な一重口でなく、本来は茶陶の水注として作られたもの。これが水指として取り上げられてきた。昭和9年の藤田伝三郎旧蔵品の売立の際の『香雪齋蔵品展観図録』に、「朝鮮唐津横手水指」として掲載されている。

○購入金額 12,600,000円 (平成21年度第1回鑑査会議)

- 13 ○種 別 <陶磁>  
○名 称 絵唐津草文壺 唐津  
(えからつそうもんつぼ からつ)  
○員 数 1口  
○窯・制作地等 唐津  
○時 代 江戸(桃山)時代・17世紀  
○品 質 陶器  
○寸法等 器高14.3 口径11.6 底径8.1 最大径18.7 cm  
○作品概要

右轆轤の成形による壺。肩に張りのある算盤玉形とし、頸部は短く立ち上がる。腰部より下方を左回転の篋削りで調整し、高台を削り出す。高台とその周辺は露胎として全体に黄灰色を呈す藁灰釉を掛ける。茶色から黒褐色の鉄絵で大型の草文を2ヶ所、小型の草文を1ヶ所描く。胎土の鉄分が吹き出し施釉部分では斑点状となる。高台端部は古い欠損が5ヶ所ある。口縁から腹部に縦に走るヒビ割れが4ヶ所、内2ヶ所は漆と金繕いで補修する。口縁内部に1ヶ所、金繕いがある。口縁端部に石ハゼが1ヶ所、鉄絵の剥落が3ヶ所ある。

絵唐津は唐津窯で16世紀末に始まる下絵付の技法で、美濃窯の志野とともに日本で最初の下絵付の焼物である。叩き成形ではなく、轆轤成形で作られる茶算盤球形の壺は絵唐津を代表する器種のひとつであり、落ち着いた色調と素朴な鉄絵に対して高い評価を与えられている。茶の湯の水指として用いられることも多く、この壺もやや小振りであるが近代以降は水指としても用いられている。

○購入金額 18,900,000円 (平成21年度第1回鑑査会議)



- 14 ○種 別 <陶磁>  
○名 称 播座双耳水指 唐津  
(るいざそうじみずさし からつ)  
○員 数 1口  
○窯・制作地等 唐津・甕屋の谷窯  
○時 代 安土桃山-江戸時代 17世紀  
○品 質 陶器  
○寸法等 高18.7 口径12.2-12.5 最大径20.9 (底径)15.5 cm



○作品概要

叩き成形で3足と双耳を付けた水指。底部は円形。三方に粘土塊による足を付ける。ほぼ中央に「逆し字」を浮き出させている。外に開き気味に立ち上げて腰部とし、櫛目状の凹線を施す。胴は内湾気味に立ち上げ、左上がりの螺旋状に8条の凹線を刻み、11箇所内押し窪める。明確な稜線をなして肩とし、内に絞りながら立ち上がる。ここにも左上がりの螺旋状の7～8条の凹線を巡らし、扁平の粘土板をたわめて両端を貼り付けた双耳を付ける。そこで横に水平に開いた後に、直に立ち上げ、再び水平に絞り、側面には櫛目状の凹線を巡らし、半面に7つの播座を貼り付ける。口縁は僅かに膨らみを持って直に立ち上げ、端部を水平とした後に下に折れ、緩く内側に伸ばして蓋受けとする。内面で胴部の裏側部分に叩き成形の際の青海波文が残る。

胎土は鉄分を多く含み、口縁蓋受け端から底部まで灰釉を施釉して黄褐色から茶褐色の色調を呈し、正面と正面右側、背面右側に鉄釉を流し掛けた部分は飴釉状の透明感のある暗褐色となる。口受け端部に4箇所小さな欠損がある。

唐津は東日本の瀬戸・美濃に対して西日本を代表する陶器窯で、九州・山口に展開する朝鮮半島系の窯の中でも最も古い歴史を持つ。朝鮮半島系諸窯の中で、唐津は桃山期の和物茶陶の創造で最も大きな役割を果たした。この水指は桃山茶陶の造形が最も力強く展開した時期の典型的な作例である。底に記された「逆し字形」の浮印から、唐津で甕屋の谷窯の作であることが分かる。

○購入金額

14,500,000円（平成21年度第2回鑑査会議）

15 ○種 別

<陶磁>

○名 称

文琳茶入 銘 薩摩文琳 薩摩

(ぶんりんちゃいれ めい さつまぶんりん さつま)

○員 数

1口

○窯・制作地等

薩摩

○時 代

江戸時代・17世紀

○品 質

陶器

○寸 法 等

高7.4 口径2.3 胴径7.4 底径3.0 cm

○作品概要

文琳形の茶入。鉄分を含んだ緻密で粘り強い素地。轆轤成形で底部から開きながら立ち上がり、ゆったりとした膨らみをたたえて胴部で最大径とした後にゆっくりと絞って、総体が林檎状の形となる。細い頸部を直に立ち上げ、端部に丸みをもたせてわずかに外に開いた口縁となる。底部は左糸切が残り、腰部分は丁寧な削り調整を施す。内面は露胎、口縁内側から腰にかけて透明感のある茶褐色釉を施し、藁灰釉が上方に掛けられ、一方で釉際まで垂れて景色となる。底部に指大の釉痕あり。口縁の約3分の1が割れたものを接合、補彩している（CT検査による）。内部に茶粉付着する。

薩摩は朝鮮半島から渡来した陶工によって九州・山口に開かれた窯のひとつ。薩摩の作種で、茶入はとりわけ評価が高い。本作は文琳形薩摩茶入の代表作であり、唐物茶入にならった和物文琳茶入としても、最も優れた作行のもの。本作は元薩摩藩主島津公爵家の昭和3年の売立出品作で、島津家に伝来したものである。島津家の茶道具については『要用集 三』の「御数奇屋御道具之事」という江戸期の文献があり、「一 薩摩文琳御茶入一箇 但国分様御所持之由」が、この茶入である可能性が高い。

○来 歴

薩摩藩主島津家。（昭和3年売立）東京国立博物館寄託

○購入金額

36,750,000円（平成21年度第2回鑑査会議）



- 16 ○種 別 <陶磁>  
 ○名 称 薩摩切子 三段重  
 (さつまきりこ さんだんじゅう)
- 員 数 1合  
 ○窯・制作地等 薩摩  
 ○時 代 江戸時代・安政2-6年(1855-59)  
 ○品 質 紅色被せガラス  
 ○寸 法 等 総高12.4 最大径10.3 蓋高3.0 上段高3.8 中段高3.8 下段高4.1 径10.0 下段底径10.0 上・中段底径9.3 蓋詰め込み部径9.1 同高0.8 cm



○作品概要 透明ガラスはわずかに黄色味を帯びる。上段、中段は同形で、下段のみ器高が高い。透明ガラスに紅色ガラスを被せ、底部は外側を複弁16弁にカットする。側面は透明の縦筋により6区画に区分し、上・中段は4×4の斜格子、下段は5×5の斜格子にカットし、それぞれの紅ガラスをボブネイル8菊にカットして装飾とする。ほぼ低い円筒形で、下段の底部はほぼ平たく、端近くでゆるく立ち上がる。内底面はやや張り出し、屈曲するように内側面となり、内側にゆるやかな曲線を持ちながら上方に立ち上がり、口縁端部は角丸の水平となる。上・中段も基本的に同様の造形だが、底部と側面の繋ぎ部を重ねのために削り込んでいる。蓋は詰め込み部を持ち、上面は八角星と対面する頂点を結ぶ線をカットし、それぞれの区画を三角錐状にカットする。八角星の外側部分の三角形はカットにより4つの三角形に区分する。側面は身と同様に6区画に区分し、3×3の斜格子で一段の装飾を巡らす。状態 蓋：上面に3箇所欠損あり。側面に2箇所、小傷があり。身：あまり傷は目立たないが、下段の底部は全体にスレがある。

薩摩のガラス製造は、第10代薩摩藩主島津齊興の時、弘化3年(1846)に江戸の硝子師四本亀次郎を招聘して始まった。嘉永4年(1851)、齊彬が第11代薩摩藩主となって殖産興業政策を進めて急速に発展、同年に紅ガラスの製造を開始し、安政2年(1855)には集成館でのガラス製造が始まっている。安政5年(1858)齊彬の死により急速に衰え、明治4年(1871)版籍奉還で集成館が廃止され終焉を迎えている。この三段重は、箱蓋裏に「薩摩國主島津齊彬公ノ安政年間手製」とあるように、薩摩切子の全盛期である安政2-6年(1855-59)の作と考えられる。薩摩切子の基準作には薩摩藩主であった島津家所蔵の作品群がある。この作品は、現在尚古集成館に所蔵され、大正10年(1921)、島津家本邸で開催の「薩摩硝子陳列会」に「紅色(漸赤色)丸三重鉢」として出品の作品と同種であり、薩摩切子の代表作に位置づけられる作品である。

○購入金額 21,000,000円 (平成21年度第2回鑑査会議)

- 17 ○種 別 <陶磁>  
 ○名 称 薩摩切子 栓付瓶・杯  
 (さつまきりこ せんつきへい・はい)
- 員 数 1具  
 ○窯・制作地等 薩摩  
 ○時 代 江戸時代・安政2-6年(1855-59)  
 ○品 質 ガラス  
 ○寸 法 等 瓶高21.4 口径4.5 底径5.7 最大径9.6 蓋高6.5 最大径5.3 盃高4.4 口径7.6 底径3.0 cm



○作品概要 瓶：紅被せガラス。透明ガラスは黄色味を帯びる。胴部を円筒形とし、肩で一気にすぼめて鶴頸状とし、開いて口縁とする。底部の一部から胴部全体、さらに肩のやや上まで紅色ガラスを被せる。底部に3箇所紅色ガラスが付着する。底部は水平で、端部を明瞭としながら、広く開いて腰となり、屈曲して胴部とする。腰部はカットして、胴部との区切りとする。胴と肩の区切りは太い

一重の削り込みを施し、頸部に向けて三重の削り込みを加える。胴部は10×10の斜格子で区切る。3段の菱形は無文だが、中央を横にカットし、上下2つの三角、中央2つの菱形となる部分は、細かな斜格子で魚子文にする。頸部は5段の亀甲状の面取を巡らす。胴部中心に全体に白斑が現れる。口頸内部に蓋によるスレ跡あり。

蓋：瓶に比べてやや青みを帯びた透明度の高いガラス。上部は複弁12弁を放射状にカットする。

杯：紅色被せガラス。透明ガラスはやや黄色味を帯びる。底部は小さくほぼ水平で、丸く立ち上がり、一段上でさらに大きく広がる。底面は8菊にカットする。腰部は2条のカットを巡らす。側面は太いカットで9区画に区分し、それぞれに3条のカットを施す。口縁に1ヶ所欠損あり。表面全体に白斑が現れる。

○来歴 渡邊千秋旧蔵  
○購入金額 23,100,000円 (平成21年度第2回鑑査会議)

- 18 ○種別 <漆工>  
○名称 屈輪堆黒払子  
(ぐりついこくほっす)  
○員数 1本  
○時代 中国 南宋時代・13世紀  
○品質 木製漆塗  
○寸法等 全長51.2 軸長14.8 径2.0 cm  
○作品概要

軸を漆塗の技法で飾った払子。軸は中央部がふくらんだ形に造り、地の黄漆に加えて、朱・黒などの色漆を何層にもわたって塗り重ねている。文様は、亀甲文のうちに屈輪文を彫りあらわしたもので、全体に大変精細な彫技をみせる。軸の上端には、獣毛とみられる毛を取り付け、取り付け部は黄紐を丸く組んで覆う。軸の下端には、後世につけられた紐がついている。

南宋墓などから出土した類品も知られているが、このように払子としての当初の姿をとどめて伝世している作例はなく、甚だ貴重である。また、軸部は朱色、黒色の漆を15層にも薄く塗り重ねて文様を彫りあらわしており、南宋独特の繊細な彫技の特色がはっきりとあらわれている。

○購入金額 15,000,000円 (平成21年度第2回鑑査会議)



- 19 ○種別 <漆工>  
○名称 蒲公英蜻蛉堆朱合子  
(たんぽぽとんぼついしゅごうす)  
○員数 1合  
○時代 中国 南宋時代・13世紀  
○品質 木製漆塗  
○寸法等 径7.7 高2.4 cm  
○作品概要

丸形、印籠蓋造の合子。蓋甲が平らかな、いわゆる一文字形を示す。朱、黄、緑などの色漆を塗り重ね、蓋には、蜂、蜻蛉、蒲公英の文様を、また、側面には、雷文繫の文様を彫りあらわす。身の内および底は、透漆が塗られ赤褐色を呈する。

多色の漆を塗り重ねて彫りあらわした文様は、文様それぞれに彫法を変えることで異なる表現を見せており、南宋時代の完成された彫技の特色をはっきりとあらわしている。小型の作品ながらも見所が多く、まことに貴重な存在といえる。

○購入金額 15,000,000円 (平成21年度第2回鑑査会議)



- 20 ○種 別 <漆工>  
 ○名 称 蓮華堆黒盆  
 (れんげついでくぼん)  
 ○員 数 1 枚  
 ○時 代 中国 南宋時代・13 世紀  
 ○品 質 木製漆塗  
 ○寸 法 等 縦 11.1 横 22.0 高 2.1  
 ○作品概要



長方形の小形の盆。口縁は太めの縁をつけ、高台は低く幅広の高台とする。見込は、黒・朱の漆を塗り重ねて、彫漆の技法で、中央に二つの蓮華と蓮葉を、四隅に菊、椿、牡丹、薔薇をあらわす。地は朱漆塗とする。裏面は、黒・朱の漆を塗り重ねて、唐草文を彫りあらわす。なお、見込や底面には、塗膜の割れなどがみられ、後世修理が認められる。

本作品は、低い高台や幅広の畳付など、宋時代の彫漆器の特徴がみられ、数少ない南宋時代の作例として貴重である。また、見込にあらわされた花卉草花文は、小さな画面を有効に使って伸びやかに生き生きと描かれており、デザインカの高さをはっきりと示している。これと同趣の作例は、「花鳥堆黒長方盤」（ポストン美術館蔵）などわずか数例しか知られておらず、まことに稀少なものと見える。なお、高台内に刻まれた「張成」は元時代の彫漆の作家で、後銘と指摘されている。同じく「項墨林」は明時代の書家、画家で、収集家としても著名であった。

- 銘文など 高台内針刻銘「張成造」、「項墨林家蔵」  
 ○購入金額 15,000,000 円 (平成21年度第2回鑑査会議)

- 21 ○種 別 <漆工>  
 ○名 称 後赤壁賦堆朱盤  
 (こうせきへきふついでしゅばん)  
 ○員 数 1 枚  
 ○時 代 中国 南宋時代・13 世紀  
 ○品 質 木製漆塗  
 ○寸 法 等 径 34.2 高 5.0 cm  
 ○作品概要



やや大ぶりの丸形の盤。厚手の口縁をもち、低い高台をそなえる。全体に黄漆の上に朱漆を塗り重ね、彫漆の技法を用いて文様をあらわす。見込中央には、楼閣や、船遊びをする人物などがあらわされ、上部には「後赤壁賦」、中央の岩部に「赤壁」、左の岩部に「是歳十月之／望歩至雪堂／將帰于臨臯／二客従予過／黄泥之坂」の文字があらわされる。見込の周囲には、菊、梅、蓮などの花卉

文が、裏面にも同様に花卉文が配され、高台には七宝繋ぎ文があらわされる。

本作品は、北宋時代の文人、蘇軾（1036-1101）が詠んだ「後赤壁賦」を意匠の典拠としている。見込上方には、「後赤壁賦」の4字、見込左中央には賦の冒頭「是歳十月之／望歩至雪堂／將帰于臨臯／二客従予過／黄泥之坂」が刻されている。なお、「歩至雪堂」は通行では「歩自雪堂」である。見込左中央には、書齋（雪堂）前の蘇軾一行、その上方には着を手に住居である臨臯亭に戻る場面が描かれる。見込下方には、長江の景観を眺めるため船に乗り込む一行、そのやや上方の岩には「赤壁」の文字があらわされる。また、見込上方には、眠る蘇軾と、夢にあらわれる道士が描かれる。つまり、見込の図様は、「後赤壁賦」の各場面を取り出してあらわしているが、場面の順や実際の位置関係は勘案されておらず、意匠にあたってアレンジがなされている。

「前・後赤壁賦」をモチーフとした作品は、絵画や工芸など数多く知られているが、この作品は彫漆器の作例としては最古に位置づけられるものである。また、同時代に制作された、同型の彫

漆器は他に 3 点が知られるのみであり、そのなかでも堆朱で飾られた作例は本作品が唯一である。文様は宋時代の様式を反映して、総じて細密で彫技も優れており、保存状態もよい。ゆえに、本作品は、南宋期彫漆の代表作としてきわめて貴重である

○購入金額 136,500,000 円 (平成 21 年度第 2 回鑑査会議)

22 ○種 別 <考古>

○名 称 彩漆盤 元始四年銘

(さいしつばん げんしよねんめい)

○員 数 1 口

○作者・制作地等 蜀郡西工

○時 代 前漢・元始四年(後 4 年)

○品 質 彩漆丸盤

○寸 法 等 口径 26.8 底径 11.1 高 6.7

○出 土 地 伝 朝鮮樂浪古墓

○作品概要

素地は布着せの夾紵胎とする。器壁は黒漆により上塗りする。内面中段は朱漆塗りとする。円形の平高台からやや外湾して胴部が開き、胴部の下 3 分の 1 ほどで稜をもち屈曲し、頸部に向かって直線的に外方へ立ち上がる。口縁は断面方形を呈する平縁口縁で、金銅製の覆輪をもつ。胴部外面には雲気文を漆画し、内部を朱と青で塗彩する。胴部内面には変形夔鳳文を漆画する。内底面には鋸歯文、菱形文、円形文が輪状に巡る。その中を流雲文によって 3 区画し、それぞれ内部を朱と青で塗彩する。各々に熊形の三獣文を漆画し、朱と青で部分的に塗彩する。口縁底部に 62 字からなる銘文を錐書し、制作年、制作地、製品規格、技術種目と参与工人名、監督官と官人名を記録する。器壁が一部変形し、口縁部から胴部にかけては 3 箇所亀裂が認められる。

本器の文様は総じて肉厚の描線による重厚な筆致であり、前漢末・蜀郡西工産の特徴をよく示す。蜀郡西工は、御用の漆器や青銅器の制作を主幹した地方官営工房であり、その製品は主として各地の王侯級の墓から出土する。副葬数は当時銅耳杯の 10 倍の価値とされた彩漆耳杯と比較してより少なく、遺存数も僅少である。

本例は、現在知られている当該時期の漆器の中でも特に保存状態が良好であり、銘文箇所も完存することから、漢代文物の基準資料と呼ぶに相応しい作品である。さらに造形面においては当時の最高等級である乘輿漆器の型式をよく遵守しており、これらを総合すると、日本国内にある漢代資料としては国宝 金彩鳥獸雲文銅盤(永青文庫蔵)と比肩すべき水準といえる。

○銘文など

銘文「元始四年／蜀郡西工／造乘輿髹形畫紵黃卸飯槃／容一斗／髹工石／上工譚／銅卸黃塗工豊／畫工張／彤工戎／清工平／造工宗造／護工卒史章／長良／丞鳳／掾隆／令史褒主」

○購入金額 50,000,000 円 (平成 21 年度第 1 回鑑査会議)



23 ○種 別 <歴史資料>

○名 称 江戸長崎街道図帖

(えどながさきかいどうずじょう)

○員 数 1 帖

○時 代 江戸時代・18 世紀

○品 質 紙本著色

○寸 法 等 縦 51.4 横 57.4 全長 1951.6 cm

○作品概要

折本装。本来は卷子であったとみられる。表紙と裏表紙は布装で、異なるデザインの龍をモチーフとした刺繍があり、表紙には「丸に三つ柏」の紋が金泥で描かれている。32 面にわたって、江戸から長崎に至る街道と宿駅、風景を連続して描く。

この図帖そのものには、書写年代を示すものは書かれていない。



しかし、例えば、近世初期の長崎街道は、筑前六宿（慶長 16-17 年(1611-1612)頃に成立）が未整備だったために、秋月街道が本筋であった。この図帖でもそれをふまえて描写しており、また佐賀を「龍蔵（造）寺」と記すなど 17 世紀初頭以前の古様を示す。いっぽう筑前六宿街道の道そのものは描写されており、寛永 13 年（1636）に築造された長崎出島が描かれ、寛永 18-19 年に成立した長崎の福岡藩と佐賀藩の番所がみえるなど、寛永年間まで下る情報も含まれる。延宝元年（1675）に直方藩に改称された東蓮寺藩がみえ、英彦山（享保 14 年(1729)以降の表記）が彦山と書かれていることなどから、図帖の情報は、ほぼ 17 世紀代に収まるものとする。さらにこの図帖は、寛永 10 年（1633）代以降の近世前期の資料とされる九州大学所蔵『肉筆道中図』（文系合同図書室請求記号：国史/17/87）と文字情報や構図が非常に類似する。九大本と比較すると、風景や人物の描写が細くなるいっぽう、瀬戸内海の航路の一部が省略されており、この図帖の方が年代が後であろう。料紙が縦 1 尺以上であることから、制作年代は 18 世紀以降とみられる。

○購入金額 10,000,000 円（平成 21 年度第 1 回鑑査会議）

24 ○種 別 <歴史資料>

○名 称 平定両金川得勝図

(へいていりょうきんせんたくしょうず)

○員 数 16枚

○時 代 清時代・18 世紀

○品 質 紙本銅版画

○寸 法 等 台紙 縦 55.6 横 95.0 本紙①縦 53.0 横 90.8、②縦 52.1 横 98.9 ③縦 53.0 横 90.8 ④縦 53.2 横 95.6 ⑤縦 53.0 横 90.5 ⑥縦 52.8 横 90.7 ⑦縦 52.9 横 91.0 ⑧縦 52.9 横 90.5 ⑨縦 53.0 横 90.7 ⑩縦 52.9 横 90.7 ⑪縦 52.4 横 91.0 ⑫縦 52.7 横 91.0 ⑬縦 53.0 横 90.7 ⑭縦 52.9 横 91.4 ⑮縦 53.1 横 90.8 ⑯縦 52.9 横 90.5 cm

○作品概要 台紙貼り。中国・清の第 6 代皇帝乾隆帝(1711-99)が、乾隆 12 年から 40 年(1747-75)にかけて四川省西方、揚子江の上流に位置する大金川・小金川を鎮圧した戦いを記念して作らせた版画。清朝に仕えていたイエズス会士宣教師に描かせた下絵をもとに銅版を彫らせたもので、乾隆 42 年(1777)に彫り始めた。各画面上部の乾隆帝による題詩は木版。全 16 図が揃っている点でも稀少である。

13 図は戦いの場面を表している、いずれも陰阻な山岳地帯に多くの石の要塞がある地域で戦いが繰りひろげられている。あとの 3 図は凱旋の様子を表している。全 16 図はそれぞれ 1 阿桂奏報收復小金川全境図、2 阿桂奏報攻克喇穆喇穆等處図、3 阿桂奏報攻克羅博瓦山礮寨図、4 明亮奏報攻克宜喜達爾図山梁図、5 明亮奏報攻克日旁礮寨図、6 阿桂奏報攻克康薩爾礮寨図、7 阿桂奏報攻克木里工噶克了口礮柵図、8 明亮奏報攻克宜喜甲索礮卡図、9 明亮奏報攻克石真噶礮柵図、10 阿桂奏報攻克苗則大海昆色爾等處図、11 阿桂奏報攻克勒烏圍図、12 阿桂奏報攻克科布曲索隆古礮寨図、13 阿桂奏報攻克噶喇依図、14 郊勞凱旋將士図、15 金川平定午門受俘図、16 紫光閣凱宴將士図である。

乾隆帝は乾隆 25 年(1760)に平定した外蒙古の西方、現在のジュンガル盆地に位置する地域である準噶爾との戦いを記念して、銅版画「準回兩部平定得勝図」を作らせた。これは、乾隆帝が初めて作らせた銅版画の戦功図で、郎世寧(ジュゼッペ・カスティリオーネ)を中心とした清に帰化していたイエズス会士達によって原画が描かれ、パリでシャルル・ニコラ・コシヤンを総監督として銅版画にされた。清朝は、これに続いて七つの戦功銅版画「平定両金川得勝図」、「平定台湾得勝図」、「平定安南得勝図」、「平定郭爾喀得勝図」、「平定苗疆得勝図」、「平定仲苗得勝図」、「平定回疆



得勝図」を国内で作成させた。

本銅版画は、乾隆帝が二つ目に作らせた戦功銅版画で、清国内で作られた最初の作品である。パリで作られた「準回両部平定得勝図」を継承するもので、特に 15 図は「準回両部平定得勝図」の平定回部献俘図と、14 図は「準回両部平定得勝図」の郊劳回部成功諸将士図を左右反転させたものとほぼ同じ構図である。ただし、銅版画の技術としては、他の清国内で作られた戦功図と同じく、明らかに見劣りがするものではある。

○購入金額 12,000,000 円 （平成 21 年度第 2 回鑑査会議）